

シリーズ

くらしの最前線 6

子どもの排泄観とトイレ環境

村上 八千世

1. 子どもの排泄観がおかしい？

トイレ利用時の意識調査からは、小学生の場合、低学年から高学年にかけて排泄そのものや排泄時の音を「恥ずかしく思う」ようになる傾向があることが分かっている（図1）。そのために学校でトイレに行きたくなくても我慢するという現象が起こっている。

筆者は小学生向けに「出前教室」を行い、排泄の大切さなどを講演しているが、子どもたちに意見を聞いてみると、大便などへの印象は単に「汚くて、くさいもの」という感じで、排便後も自分のものを決して見ようとしない子ども、「見るものではない」と敬遠する子どもも少なくなく、「大便なんて、できれば出てこなければいいのに」と考える子どももいるほどだ。

排泄は食べることと同様に、われわれが生活している限りは重要な行為であるにもかかわらず、子どもの多くは「排泄」や「排泄物」に対してよいイメージを持っていないのが現状である。

このような子どもの意識の起源をさかのぼって考えてみると、幼児期のトイレトレーニングの時期に至る。子どもが排泄の自立を遂げるまでは親や保育士も「排泄」を肯定的に捉え、その言動も「いうんちねー」「うんちでたの？ えらいねー」などで対応することが多い。しかし子どもが一旦自立して排泄ができるようになると、今度はしつけが優先され「そんなことしたら汚いでしょ」「くさいからだめ！」など、否定的な言葉で排泄を捉える機会が圧倒的に増加するのである。さらに、各メディアからも否定的な情報が盛んに流れてくるとなると、学童期の子どもが排泄に対してマイナスのイメージを強く持っても無理はないということになる。

Yachiyo MURAKAMI アクトウェア研究所代表

著者紹介〔略歴〕1965年大阪府生まれ。1998年独立、アクトウェア研究所設立。2004年早稲田大学大学院人間科学研究科修了。2004年早稲田大学人間総合研究センターリサーチレジデント。〔専門分野〕発達心理学。主な著書に「うんこのえほん うんぴ・うんにょ・うんち・うんご」など。<http://members.aol.com/YMcomfort/>

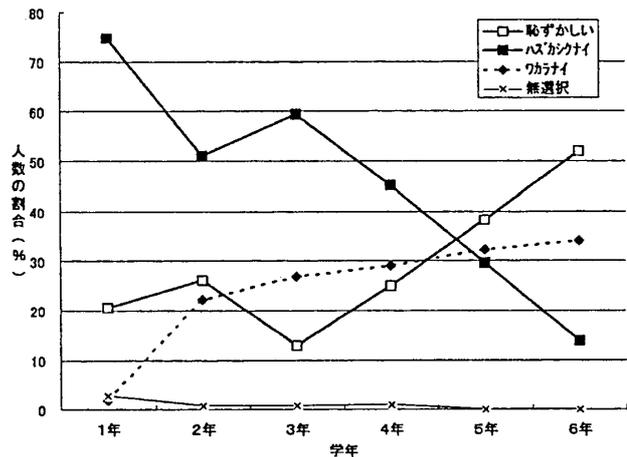


図1. 学校でトイレに行く恥ずかしさ (N=868人)

東京都内の1小学校、神奈川県下の2小学校、奈良県下の1小学校、静岡県下の1小学校の1年から6年の児童計903人から回答があり、そのうち有効回答868人分を分析対象とした。

もちろん、子どもたちに「汚さ」や「恥ずかしさ」をしつけて、不衛生な状態から守ったり、社会の中で恥をかかないようにしてあげることは大切なことである。しかし現状では否定的なマイナス面を強調することが先行し、排泄の大切さ（プラス面）は自明であるがゆえに、かえって語られる機会は少ないのである。もっと意識してバランスをとっていく必要があると思う。

2. 清潔で気持ちよいトイレで排泄指導を！

保育者が子どもに排泄の指導やしつけをする場合、汚いトイレはより「汚い」「くさい」という言葉を発しやすくするから、トイレ環境と子どもの排泄観は大いに関係があると思う。

幼児のトイレの使い方は大胆不敵である。特に2歳児くらいまでは、汚さや恥ずかしさに対する感覚が十分に発達していないため、ぬれたタイルの床をお構いなしに素足で歩き、しがみつくとように小便器や大便器に身をあずけて用を足し、中には便器に手を入れる子

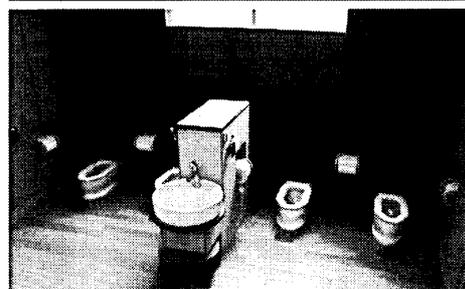
どもまでいる。大人の私たちが見ると「わっ、きたない」と叫びたくなるシーンもたびたび起こるが、これは子どもたちのたくましさでもあると思う。子どもは自分に合った方法で排泄行動の自立を果たしてゆく。子どもの汚さや恥ずかしさに対する感覚は大人に比べてはるかに鈍感であるが、その鈍感さが自立を促進させている一面もある。ついつい「きたない」「だめ!」と言って、行動を中断させてしまいがちだが、便器にしがみつくとのは身体を支えるため、床にしゃがみこんで衣服を整えるのは自らの技術の未発達を補うための子どもなりの工夫であると思う。このような子どもの大胆不敵な行動に大人が寛容であるためにはトイレ環境を清潔に保っておくことが不可欠である。大人が気持ちよいと感じられるトイレ環境ならきっと子どもたちへの接し方もおおらかになるのではないだろうか。

3. おおわだ保育園（大阪府門真市）の事例

2005年に改修を行い、「2006年こども環境学会デザイン賞」を頂いたおおわだ保育園の1～2歳児のためのトイレについて紹介させていただきたい。このプロジェクトには計画当初から著者がコーディネーターとして関わり、企画・設計について提案を行った。

まず、大きなコンセプトとして「トイレ＝汚い場所」という考えをスタッフ全員が改めること、子どもの自立を促進するプランニングを目指すことの2点を設定した。

改修前のトイレは保育室とトイレが壁でしっかり区画されていた。これはトイレの汚さが保育室に持ち込まれないようにするための昔からの設計の考え方であり多くの保育園施設が採用してきた方法である。床は水洗いで、スリッパが置かれており、トイレは子どもの用足し機能だけでなく、汚物処理、洗濯、沐浴などの多くの機能を背負っていた。そのため子どもはスリッパに履き替えたり、汚れ物が入ったバケツをよけて便器にアプローチしなければならぬ状態であった。保育士は子どもが失敗しないように、いつも緊張してはならなかった。改修後のトイレでは保育室と一続きのフローリングの床を採用し、空間的に保育室と一体化したプランにした。壁はなくし、代わりに隙間があって見通しの利くパーティションを設置し、子どもと保育士が離れていても、お互いにアイコンタクトが取れるような工夫がされている。これらの工夫によって子どもは保育室内と同じ感覚でトイレに簡単にアプローチすることができ、一人でトイレにいけるよ



上：保育室側からトイレを見るところ。
中：トイレ内部。便器に周りには手すりやペーパーホルダーが配置し、子ども一人でも使いやすい。
下：トイレ内部から保育室側を見たとす様子が見える。

うになる時期が半年以上早まった。

トイレと保育室を一体化することで、当初心配された衛生性の確保については、現在のところ問題なく、汚れてもその都度簡単にすぐ拭き取ることができ、むしろ従来の水洗い方式よりもきれいに保ちやすい状態になっている。トイレの床はまさに寝転がりたくなるような衛生感さえ感じられる。

改修前は子どもにとって、トイレは「早く立ち去りたい場所」であり、落ち着かない場所であった。改修後はのんびりと、ゆっくりと便器に座っていたり、隣の友達とおしゃべりする子どもの様子が見られる。保育士さんたちにとってもトイレタイムのあわただしさが緩和され、子どもに対してゆとりをもって接することができるようになったという感想を頂いている。

保育士さんたちのトイレに対するイメージが変わることで、子どもたちへの接し方も自ずとおおらかな方向へ変わるということを示す事例になったと思っている。